

## 飛び入りで協働活動に参加する ～野沢温泉道祖神祭り三年間の事例より～

### Unplanned participation into collaborative activities: Case studies from 3-year fieldwork of Nozawa-onsen Dosojin festival

榎本 美香<sup>†</sup>, 伝 康晴<sup>‡</sup>  
Mika Enomoto, Yasuharu Den

<sup>†</sup> 東京工科大学大学メディア学部, <sup>‡</sup> 千葉大学文学部  
School of Media Science, Tokyo University of Technology, Faculty of Letters, Chiba University  
menomoto@stf.teu.ac.jp

#### Abstract

In this paper, we investigate how necessary conditions for actions are fulfilled by the participants who participate in a collaborative activity that has not been planned in advance. These necessary conditions are: the participants i) have concern about the event at hand; ii) are aware of what to help with; iii) stand at a nearby site of the event; and iv) have an ability to help. In some cases, the participants' concern and awareness are evoked by an utterance explicitly asking some support. In other cases, only participants who have concern about the event, or the cognitive states of other participants being involved, and thereby find what to do can take part in the activity.

**Keywords** — Unplanned participation, concern, awareness, collaborative activities

#### 1. はじめに

本研究の目的は、予め誰が何をするか決まっていない状況で、その場で繰り広げられる協働活動にどうすれば参加できるのかを明らかにすることである。協働活動とは、2人以上の参加者が同時に1つの作業に従事することを指す。榎本・伝(2016)では協働活動に参加するための必要条件として以下の4つを挙げた。

1. 何が為されようとしているかに関心を向けている
2. 手助けの必要な箇所があることに気づいている
3. その活動に参加できる位置にいる
4. 手助けをする能力(知識や技能)がある

たとえば、ブルーシートを広げるという協働活動に参加するためには、まず他者がブルーシートを広げようとしていることに関心を向けていなければならない。そして、その活動を達成するためには誰かがシートの一部を持ってやった方が効率的であることに気づかねばならない。しかも、

ちょうど手を差し出せばシートに届く位置にいることも重要である。その上、どこをどう引っ張ればシートを広げられるかといった知識や手でシートを引っ張るといった技能を持ち合わせていなければならない。

これらは身体行為遂行の前提条件(Allen, 1983; Litman & Allen, 1987)と関連している。榎本・伝(2015)は、指揮者による「指令」の事前条件が聞き手たちの行為遂行の前提条件から構成されることを示した。そこでは、みんなで木を引くための「指令」の事前条件として以下の4つがあることを示した。

**聞き手(たち)の知識** 聞き手(たち)が行為を遂行する知識を有する(例: 木の引き手(たち)が運搬方法・移動方向を知っている)

**聞き手(たち)の配備** 聞き手(たち)の身体が行為を遂行するための配置になっている(例: 木の引き手(たち)が運搬が可能な位置についている)

**事物の状態** 行為に関与する事物がその行為の遂行に適切な状態にある(例: 木の枝先が養生されている)

**場の状態** 行為が遂行される場がその行為の遂行に適切な状態にある(例: 進行方向に障害物がない)

協働活動へ参加するための必要条件4「手助けをする能力がある」は「指令」の事前条件聞き手(たち)の知識であるし、必要条件3「その活動に参加できる位置にいる」は事前条件聞き手(たち)の配備に等しい。「指令」の場合には、これらの前提条件が整っていない場合、指揮者がいち早く聞き手(たち)に指示してこれを満たしていく。

しかし、指揮者がいない場合には、その場にいる者たちが自ら協働活動の必要条件を満たしていかなければならない。この時、問題になるのが協働活動の必要条件1「何が為されようとしているかに関心を向けている」や必要条件2「手助けの必要

表1 道祖神祭りの支度場面の収録内容と既収録時間

行事名	活動内容	時期	既収録時間	既収録年度
シート洗い	ブルーシートの掃除	6月上旬	17時間(3年分)	2014, 2015, 2016年度
御神体伐採	道祖神木像の伐採	7月中旬	17時間(3年分)	2014, 2015, 2016年度
ぼや出し	社殿材料の収集	9月下旬	29時間(3年分)	2013, 2014, 2015年度
御神木伐採	社殿材料の木材伐採	10月中旬	238時間(4年分)	2012, 2013, 2014, 2015年度
御神木里引き	御神木運搬等	1月13日	158時間(4年分)	2012, 2013, 2014, 2015年度
社殿組み	社殿造営等	1月14日	214時間(4年分)	2012, 2013, 2014, 2015年度
道祖神祭り	上棟式・祭り	1月15日	178時間(4年分)	2012, 2013, 2014, 2015年度
シート片付け	道祖神場のブルーシート上げ	4月上旬	11時間(2年分)	2014, 2015年度

な箇所があることに気づいている」である。指揮者がいる場合は指揮者がその活動に関心を向けさせたり、調整が必要な作業内容を指摘したりするため、これらの条件は前量化しなかった。従来の計画立案の枠組みでも、関心を払っていることや何が必要かを発見する箇所は成立していて当然の前提として言及されなかった。しかし、目の前で刻々と移り変わっていく作業に携わるには、今ここで何が行われようとしているかに関心を向け、その中で自分がどのパートを受け持てば良いのかに気づくことが必要になる。

本研究では、予め誰が何をするかきまっていないような状況において行為者たちが協働活動に参加するために、前述の必要条件がどのように満たされていくかを分析する。

## 2. 分析資料

### 2.1 収録場所

長野県下高井郡野沢温泉村

### 2.2 収録対象

野沢温泉で1月に行われる道祖神祭りの支度を担う、「三夜講」という数え42歳につらなる3学年の集団の相互作用を収録対象とした。三夜講内では、毎年42歳30名弱の集団が祭りの中心的な執行を担う「世話人」となり、それより年下の集団は「見習い」として世話人を手伝う。また、世話人を終えた年上の集団は主だった行事のみ「後見人」として世話人を補佐する。図1にこの模式図を示す。

例えば、前「三夜講」は2013年度に数え42歳をむかえた寶友会を筆頭に、その時41歳であった成翔会、40歳であった焔心会から編成されていた。2013年度は寶友会が世話人、成翔会・焔心会は見習いとして参加していた。2014年度には、成翔会が世話人となり、焔心会は見習い、寶友会は後見人として参加した。2015年度には、焔心会が世話人となり、寶友会・成翔会は後見人として参加した。また、現「三夜講」の最年長グループである励翔会が引き継ぎのため見習いとして参加した。

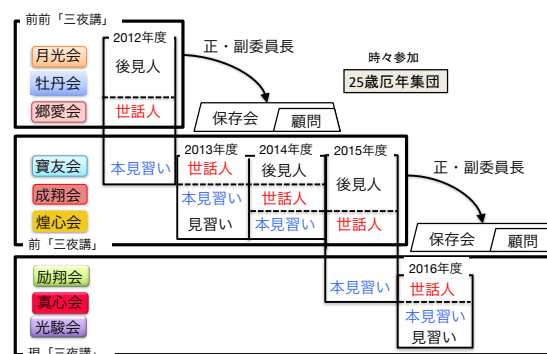


図1 「三夜講」模式図

2016年度は「三夜講」全体が入れ替わり、励翔会が筆頭となり、その下の2学年が新たに加わる。

「三夜講」各集団の代表者2名（道祖神委員長・副委員長）の6名は保存会として次の「三夜講」の指導にあたる。これに加え、総元締めである野澤組から顧問という役職の者が数名、社殿造営の指導に加わる。顧問以外の保存会は3年毎に入れ替わる。主たる行事には25歳厄年の男性も参加する。

### 2.3 収録方法

筆者らを含む、最大時総勢9名<sup>1</sup>が各自デジタルビデオカメラを手持ちで対象を追いながら撮影。同一場面を別アングルから撮影した場合は、最初に手拍子を入れ、収録後その情報から同期した。

### 2.4 分析内容

収録対象である行事名と既収録時間を表1に示す。今回はこの中で、役職による仕事が予め決まっておらず<sup>2</sup>、手の空いている者が随時行うといった作業に着目する。

## 3. 分析

協働活動が生じるにあたり、次の2つのパターンが考えられる。1つは何も活動に参加していなかつ

<sup>1</sup>行事の大きさに応じて収録人数を調整している。

<sup>2</sup>道祖神委員長、副委員長、総括、副総括、道具、縄、桁、ぼや、運搬、事務局といった役職があり全員がどこかに属している。主だった作業は役職ごとに予め割り振られており、誰が何をするか決まっている。

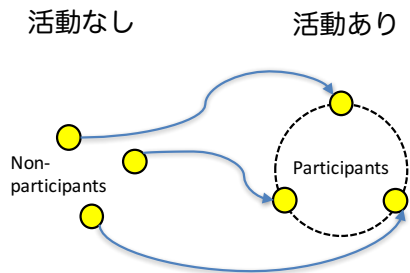


図2 始動型参与

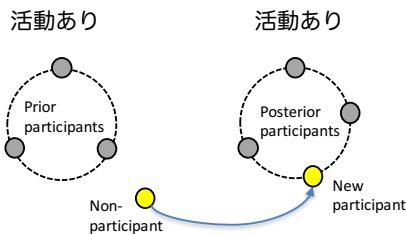


図3 編入型参与

た人々(non-participants)がある活動を開始する場合である(図2)。これを「始動型参与」と呼ぶ。もう1つはすでに活動をしている人々(prior participants)に後から別の人(new participant)が加わり参加者が拡大する(posterior participants)場合である(図3)。これを「編入型参与」と呼ぶ。以下、この2つの参与パターンごとにいかにして参加者たちが協働活動に入っていったかを分析する。

### 3.1 始動型参与における参与の仕方

活動を行っていなかった人々がある活動を開始する例を見てみよう。

#### 3.1.1 開始の呼びかけがある場合

まず、活動開始を呼びかける発話がある場合をみる。例1(図4)は、2016年1月13日10時半頃の出来事である。この年の世話人は三夜講最終年度の焠心会であり、後見人が寶友会・成翔会である。また見習いとして次の三夜講年長組の励翔会がついている。この時間帯は、祭り会場となる道祖神場の最終整備が行われる。午後に御神木の里曳き、翌日は社殿造営と祭り支度の最終仕上げとなる作業が控えている。その前に、諸々の細かい準備を終えておかなければならない。この場面は、道祖神場の各部所の整備がほぼ終わり、最後に道具 TENT を完成させれば終わりという時間帯である。道具 TENT とは14日の社殿造営のための道具をしまっておくための TENT である。雪が TENT 内に吹き込まないようにするため、周囲や天井がブルーシートで覆われる。基本的には、道具係の人々

が用意すべきものであるが、他の作業を終えた人達もこれを手伝っている。周囲のブルーシートを張り終わり、風でめくれないようシートの裾に雪をかけておくという作業が終わろうとしている。

例1では、道具長の「そしたら手:空いた人ちょっとあのピンク<sup>3</sup>」(1)「大屋根(.)張っちゃうから」(5)という発話を契機として、TENT の屋根にブルーシートをかぶせて固定するという協働活動が開始される。この発話は、手助けの必要がある箇所を告示すると同時に、周囲の関心を集めるものでもある。特に誰に何をしろと指示しているわけではないが、「雪よけのためにTENT の屋根にはブルーシートをかけておくものだ」という知識があれば、この発話によって道具長がどんな作業を開始しようとしているのか分かる。1, 5の発話は両方とも大きな張りのある音声で発されており、これが周囲にいる「手の空いた人」全員に向けたものであることがデザインされている。

焠心会道具係はTENT の中に入ろうとしていたが、1の発話の「そしたら」を聞いて道具長の方へ頭を振り向け、そのまま身を翻して道具長のもとへ駆けつける(2)。同じ世話人の道具長と道具係ということで、この道具係は最も道具長を補佐すべき立場にある上、直前にこのピンクのブルーシートを畳んでいたの、置き場所も用途も把握している。こういった条件が整っていたため、1の発話の最中に真っ先に道具長の元へ駆けつけることができたのだと考えられる。

続いてブルーシートに手をかけるのが成翔会の2人である。1人は桁長、もう1人は役職不明(成翔会x)であるが道具係ではない。この2人は広げられようとしているシートの前にいて、何も作業をしていなかった。5の発話の「大屋根」まで聞いて、道具長の方へ歩み寄り(6, 7)、ブルーシートを広げるのを手伝う(11, 14)。道具係ではないため、1の発話だけではこれから何が行われるか予測できなかったとみえる。しかし、「大屋根」という単語と道具長がブルーシートを広げだしていることから、TENT の屋根にブルーシートをかぶせて固定するのを手伝ってほしいのだと分かったのだろう。「手の空いていた」2人は前に歩みでる(図5画面右側の2人)。

また、焠心会総括は1の発話中にTENT 脇から道具長の方へ回り込んでいき(4)、見習いである励翔会の道具長もTENT の裏側から走り出てくる(8)(図5画面左側の2人)。見習いは同じ役職にある世話人と常に行動を共にしており、この人もま

<sup>3</sup>ブルーシートは古いものも再利用され、その汚れやへたり具合に応じてピンクやブルーや黄色といったリボンが付けられている。中でもピンクは新品(同様)で大きなシートであることを表示する。

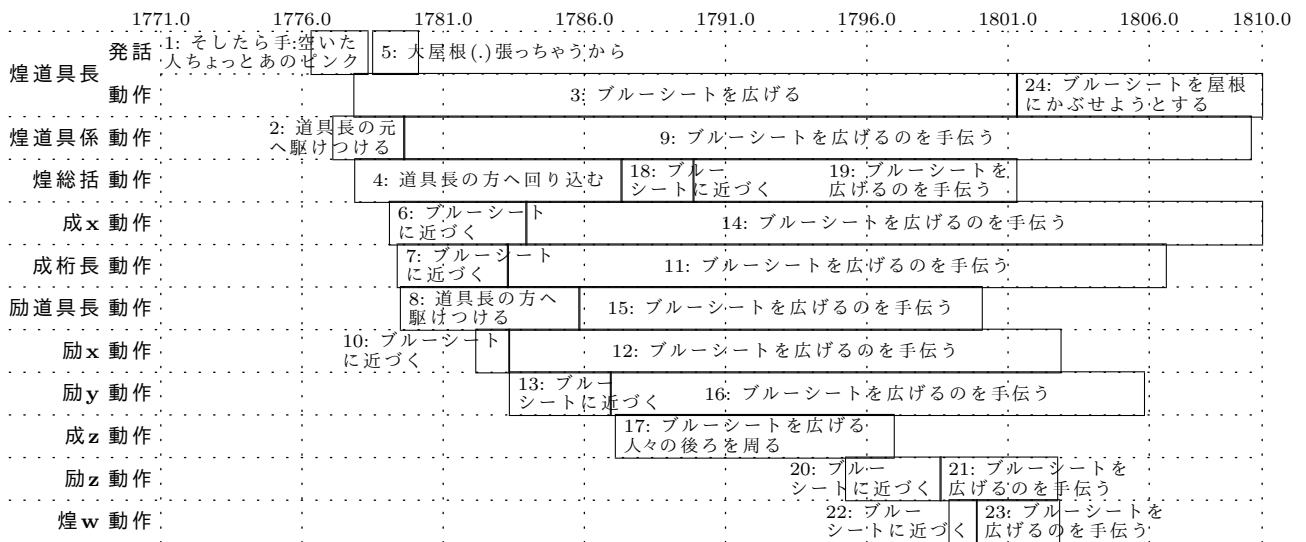


図4 例1: 始動型参与(呼びかけのある場合)



図5 道具長の呼びかけでブルーシートに集まる人々

た道具長を最も補佐すべき立場にある。おそらくテントの裏で雪をシートの裾にかけるという作業をしていたであろうが、発話の内容を理解するや否やそちらに駆けつけている。総括は初動は早い、ブルーシートの近くへ来た時にはすでに皆がブルーシートを広げるのを手伝っていて、一瞬躊躇する。が、再度、ブルーシートに近づき(18)、遅れてこの作業に加わることになる(19)。

初動は遅れるが、煌心会道具長の真後ろにいた励翔会xも一歩前に踏み出し(10)、成翔会2人とほぼ同じタイミングでシートに手をかけている(12)。少し遅れて、別の励翔会yもテント脇から回り込んできてシートに近づき(13)、手伝う(16)。この励翔会の2人が活動に手を出すタイミングが先の4人より少し遅れているのは、何が行われようとしているのか一度見てから動くという間を挟んでいるからのように思える。まだ道具テントの完成形を知らない励翔会は、率先してブルーシートを広げに行くのではなく、すでに広げようとしている人々の手助けをする形で活動に入っている。

このように呼びかけがある場合、その発話を契機に周囲の者はこれから行われる活動に関心を向けられると同時に、どのような手助けが必要か気づくことができる。煌心会道具係や励翔会道具長のように、開始されようとする活動の場にいなければ、駆けつけることで位置の条件がクリアされる。また、たまたま近くにいたという者も参与しやすい。そして、何を行いたいのかに気づきうる知識のある者から参与していくといえる。

### 3.1.2 開始の呼びかけがない場合

今度は、活動開始の呼びかけがない場合をみる。例2(図6)は、2013年9月29日16時半頃の出来事である。三夜講初年度で、寶友会が世話人、成翔会が見習いとして参加している。煌心会はこの行事には参加していない。朝から「ぼや出し」<sup>4</sup>が行われていたが、それが早く終わったため、本来は10月中旬に行われる桁材等の伐採が午後から行われた。山で伐って運んできた木材を桁割場<sup>5</sup>でトラックから下ろしている場面である。突発的に行われた作業であり、特に役職によって持ち場が決まっているわけではなく手の空いた人が集まっている。

例2で、成翔会zはクレーンで吊り下げられた木の端を手で押さえて、あまり振動しないよう補佐している(1)。成翔会委員長も同じ箇所を押さえるが(2)(図7)、荷台の上で運送業者の人が小さい木を手で荷台から下ろそうとしている(3)のに気づき、荷台へ近づき(4)その作業を手伝う(9)(図8)。この動きを察した寶友会xも荷台へ近づき(5)これを手伝う(11)。同様に、成翔会ぼや長も荷台に近

<sup>4</sup>社殿の材料として使われる小枝の束を山から持ってくるという作業

<sup>5</sup>普段は役場前の駐車場である。



	4213.0	4218.0	4223.0	4228.0	4233.0	4238.0	4243.0	4248.0
成z 動作	1: 木の端を押しえる							
成委員長 動作		2: 木の端を押しえる	4: 荷台へ近づく			9: 小さい木を手でおろす		
業者 動作		3: 小さい木を荷台から下ろそうとする						
寶x 動作		5: 荷台に近づく				11: 小さい木を手でおろす		
成x 動作		6: 成zを手伝う	10: 荷台に近づく	14: 小さい木の方へ移動		15: 小さい木をおろすを手伝う		
成運搬係 動作		7: 荷台に近づく	13: トビを置く	16: 小さい木に近づく		17: 小さい木をおろすを手伝う		
成ぼや長 動作		8: 荷台に近づく				12: 小さい木をおろすを手伝う		

図6 例2: 始動型参与(呼びかけのない場合)



図7 活動の前



図9 木を手で下ろす活動への参加



図8 木を手で下ろす活動の開始

づき(8)これに参加する(12)。成翔会xは成翔会委員長が荷台に近づく動きにつられたかのように前に出るが、どこを手伝うか定まらず最初クレーンで下ろしている木の方へ体を向ける(6)。しかし、小さな木を下ろそうとしているのに気づき、荷台に近づくも(10)、すでに3人がこの木に取り付いておりスペースがない。この木が荷台から引きずり出された段階で、再度この木に近づき(14)ようやく運び下ろす作業に参加する(15)(図9)。成翔会運搬係も、荷台に近づくが(7)、トビを手にしたためこれを置き(13)、木が荷台から出てきたのを見計らって近づき(16)、運ぶのを手伝っている(17)。この活動が開始される前、図7を見ても分かる

ように、周囲の人々は荷台から大きな木を下ろすという作業に関心を向けている。ところが、特に手助けの必要な箇所がない。その中で、運送業者の人が小さい方の木に手をかけて、荷台の後方へ押し出そうとする。ならば、受け取る人間が必要になる。これにいち早く気づいた成翔会委員長が荷台へ行ってその活動を開始する。これを見て周囲の人々が次々と動き出す。このように活動開始の呼びかけがない場合は、今そこで何が必要なのかに自ら気づく必要がある。また、木を運ぶためには木に接する位置へ移動する必要がある。そして、ある程度小さな木は手で運搬することが好まれるという三夜講独自の指向性に関する知識も必要である。成翔会はこの日、三夜講の作業初日であり木に対する接し方はほとんど知らなかったはずである。ただし、山での桁材伐採時に玉切りされた木をロープで運んだり、崖から手で下ろしたりという作業を通じて、「そのぐらいは手で運べ」という言い回しなどから、この指向性を学んだ可能性は高い。また、成翔会委員長はこの年の前年まで7年間桁材等の伐採を行ってきた木こりである。三夜講ではクレーンを使うより手で木を扱う方が好まれるという指向性を他者よりもよく知っていたため、初動の早さにつながったといえる。

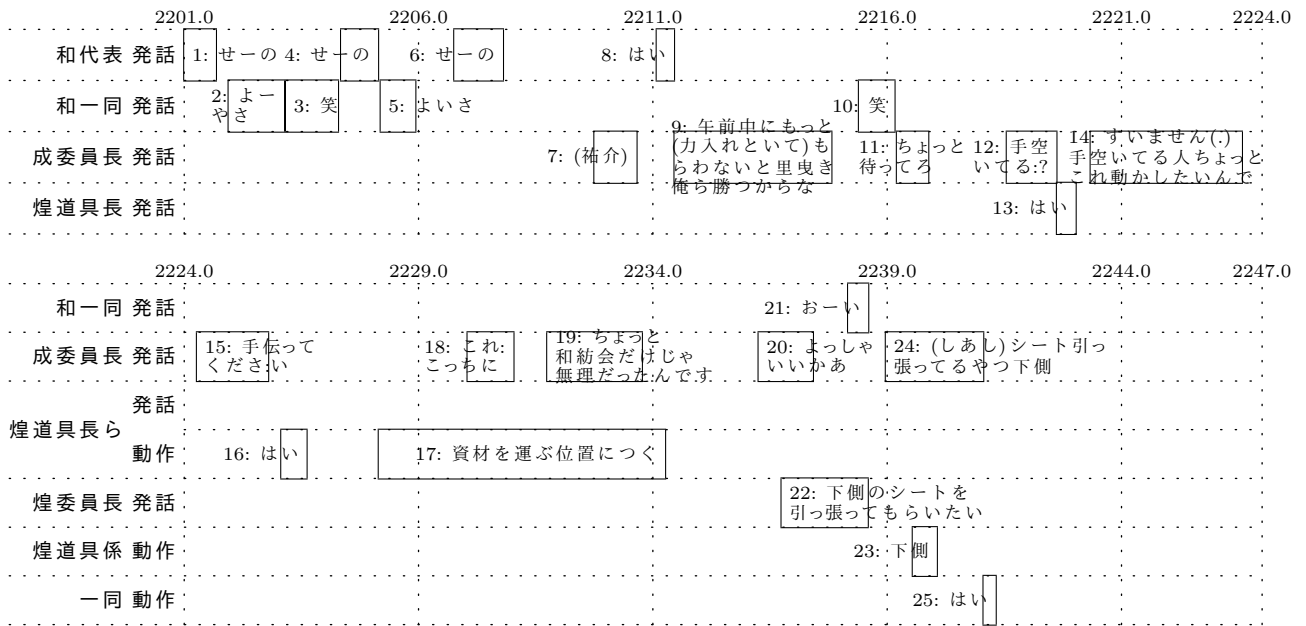


図 10 例3:編入型参与(呼びかけのある場合)

### 3.2 編入型参与における参与の仕方

今度はすでに行われている活動に途中から別の人が入るタイプの「編入型参与」の仕方をみる。

#### 3.2.1 編入の呼びかけがある場合

例3(図10)は2015年1月13日午前8時頃のデータである。世話人が成翔会、見習いが煌心会である。またこの日は25歳厄年の和紡会も参加している。この例では、社殿造営に利用される「燃え草」「豆がら」などの資材をブルーシートでくるんだものを移動させようとしている。この作業は委員長の指示の下、25歳厄年が行うことになっている。

例3の場面は成翔会委員長が燃え草の移動先を示し、和紡会で移動させようとして指示した後の出来事である。和紡会代表が「せーの」と声をかけ(1)、和紡会一同「よーやさ」と資材を押すが(2)、全く動かない。このため3で笑いが起こっている。この年の25歳は例年と比べ人数が半分程度の十数名になっているせいである。続けてもう一度「せーの」(4)「よいさ」(5)とやるが動かず、次の「せーの」(6)という代表の掛け声に一同動こうとしない。これをみた成翔会委員長は和紡会代表に向かって、「(祐介)」(7)「午前中にもっと(力入れといて)もらわないと里曳き俺ら勝つからな<sup>6</sup>」(9)と冗談をいい、「ちょっと待ってる」と作業を止める(11)。

ちょうど道具テントの移動を終えて側を通りかかった煌心会道具長らに向かい成翔会委員長が「手

空いてる?:?」と訊ね(12)、「はい」という返事が返ってくると(13)、周囲に大声で「すみません(.)手空いてる人ちょっとこれ動かしたいんで」と呼びかける(14)。12と14の発話で人手が足りないこと、何を手伝ってほしいのかが分かる。煌心会道具長らはそこで行われている活動に関心を向け、手助けの必要な箇所を知ることができる。すると、煌心会道具長ら十数名が資材を運ぶ位置へ新たに加わる。さらに「これ:こっちに」と何をするのかを示され(18)、その理由「ちょっと和紡会だけじゃ無理だったんです」まで明示される(19)。これによって、現在の参与者(prior participants)だけでは力不足であること、より大きな集団(posterior participants)に拡大する必要があることが明らかになる。これに、煌心会委員長がさらに「下側のシートを引っ張ってもらいたい」とつけ加える(22)。その結果、全体で20名を超える大部隊となり、成翔会委員長は「よっしゃいいかあ」と全員へ号令をかける(20)。

今行おうとしている活動に参加することを呼びかける発話がある場合、それを契機に関心や必要箇所を知り、新たな行為者がスムーズにその活動に参加することができる。さらに、参加した後、何をどうするかまで指示されることで、何をしようとして何に躓いていたのか事前に知らなくとも途中参加が可能になるのである。

#### 3.2.2 編入の呼びかけがない場合

では例3のような編入の呼びかけがなく、後から参加する行為者たちが自ら率先して入っていく場合はどのようなやり方がされるのだろうか。

<sup>6</sup>年後に42歳厄年成翔会と25歳厄年和紡会の御神木曳き競争が行われる。ここで力を使っておいてもらおうと自分たちが競争に勝つという意味であろう。

	1811.0	1816.0	1821.0	1825.0
焔道具長 動作	1: シートが頭頂部に引っかかる	2: 一瞬力を抜く	7: 引っかかっている箇所を外そうとする	
励委員長 動作	3: ブルーシートに近づく		5: ブルーシートの一端を持ち上げる	
成y 動作		4: ブルーシートに近づく	8: シートの一端を手で持ち上げる	
成z 動作		6: ブルーシートに近づく	9: シートの一端を揺ち上げる	
成運搬係 動作			10: テント頭頂部へ近づく	

図11 例4: 編入型参与(呼びかけのない場合1)



図12 傍観する人々



図13 手助けに行く人々

例4(図11)は例1の直後の出来事である。皆で広げたブルーシートをテントの屋根にかけようとしている。図12はテント正面に向かって右側の映像である。焔心会道具長が1人でブルーシートを持ち、テントの頭頂部を超えさせようとしている。道具長の後ろに見習いの励翔会の委員長がこれを見ている。また、図の左端には傍観する成翔会5人が写っている。

道具長がシートを引っ張るも頭頂部に引っかかってしまう(1)。ここで道具長は断念したように一瞬力を抜く(2)。すると、背後にいた励翔会委員長が速やかに近づいて(3)、道具長の左隣からシートを持ち上げる(5)。傍観していた成翔会のうちの2人もブルーシートに近づき(4, 6)、シートを持ち上げる(8, 9)。図13がその時の映像である。これに力を得たか、焔心会道具長もまたジャンプして引っかかっている箇所を必死で外そうとしている(7)。それでも中々外れないので、背の高い成翔会運搬係が回り込んできてこれを助けようとする(10)。

例5(図14)は同じ時のテント正面に向かって左側である。こちらでも頭頂部が越せず、焔心会wが頑張っていると(1)、成翔会wが近づいて(2)これを手伝う(3)。それでも超えないのだが、すぐ真後ろにいた焔心会ぼや係がすっと手を伸ばしてブルーシートを超えさせる(4)(図15)。

例4, 5から分かるように、基本的には先に参与している行為者(prior participants)だけで人手は足りている。しかし、その活動に参加していない者もその活動に関心を向けている。そして、何かトラブルが発生して手助けの必要な箇所が新たに発生すると、すぐに近づいて手出しをすることで新たな集団(posterior participants)が生じるのである。この時、励翔会委員長や成翔会z, y, wと、その後まだ問題が解決できなくて手出しをする成翔会運搬係や焔心会ぼや係という2段構えになっているのが面白い。最初に駆け寄る人は人手を増やすことで問題を解決しようとし、それでも解決できないという事態を招いている。この時、二の矢でより問題を解決できそうな(この場合は背の高い)人間が入ってくるのである。

#### 4. 議論

本研究では、予め誰が何をするか決まっていないう状態で、活動が新たに始まる場合の始動型参与の仕方と既に行われている活動に遅れて参加する編入型参与の仕方を見た。協働活動に参加するための必要条件がどのように成立するか以下にまとめる。

活動への関心は、始動型参与・編入型参与のいずれでも呼びかけのある場合には、呼びかけを契機として生じていた。例1や例3にみられる「手の空いている人」という呼びかけが典型であり、この発話によって行為者たちの関心がない状態からある状態へ変化する。一方、呼びかけのない場合は、始動型参与・編入型参与のどちらでも最初から行為者が今行われている作業を見守りながら関心をよせているという状態が存在している(例2, 4, 5)。つまり、呼びかけがない場合は行為者たち自身が関心のある状態にある。

気づきについては、呼びかけのある場合その直



	1812.0	1817.0	1822.0	1827.0	1832.0	1836.0
煌w 動作	1: ブルーシートを頭頂部を超えさせようとする					
成w 動作	2: テントに近づく		3: テント頭頂部を超えさせるのを手伝う			
煌ぼや係 動作						4: テント頭頂部を超えさせるのを手伝う

図14 例5: 編入型参与(呼びかけのない場合2)



図15 背の高い人が助ける

後にどんな手助けが必要かが言及されている。例1では、「あのピンク(の印のついたブルーシートで)」「大屋根(.)張っちゃう」、例3では「ちょっとこれ動かしたいんで」「これ:こっちに」と行為者たちが行う活動が言語的に示されている。この発話を契機として、行使者たちは手助けの必要な箇所に気づくことができる。呼びかけがない場合は、行為者たち自身がこれから必要な行為に気づく必要がある。始動型の例2では、まず最初の1人が小さな木を手で下ろすのを手伝うことに気づき動きだす。この動きを見た周囲の数人が、次々に同じことに気づき動き出している。後続の人々は他者の気づきへの気づき(高梨, 2010)と言えるかもしれない。編入型の例4, 5ではテントの頭頂部にブルーシートがひかると同時に周囲の人々が気づいてすぐに動いている。逆に言えば、手助けの必要な箇所に気づけなかった人は相変わらず周辺で立ち続けており、活動に参加できないのである。

位置は、すべての事例において行為者たちは参加することになる活動が生じる場所まで数歩のところにいる。呼びかけのない場合は、必要な手助けに気づき得るほどの距離にいたということであり、必然的に近くにいることになる。呼びかけのある場合は、遠くまで人を呼びにいくということも原理的には可能であろうが、周囲にいる人が優先される。あるいは、周囲に人がいる時のみ呼びかけが発せられるとも考えられる。

能力は、基本的に要請されるのが力仕事であることから手助けする能力は誰にでもあることが多い。例1のように「あのピンク」「大屋根(.)張っちゃう」という言語的表現で何を要請されているか気づくには多少の知識が必要である。このような場

合、知識の無い者は知識のある者たちがしようとしていることをひとまず観察してから参加しないといけないため、初動に差がでる。また例5のように背の高いといった個人特性に特化してできるこの場合は、その特性を持っている人が活動に参加することが優先されるだろう。

このように見てくると、指令という言語行為(榎本・伝, 2015)は行為者たちが協働活動に参加するためのやり方の一部であることが分かる。他にも、行為を要請する発話なしに、行為者たち自身が自ら気づき活動に入っていくというやり方がある。協働活動を引き起こすには、まず最初にこれから成されるべき活動に関心を向け、どのような手助けが必要かに気づいている必要がある。関心や気づきが指令者からの発話で得られないような場合には、近い位置にいて手助けする能力があっても活動に参加できないことを鑑みれば、活動に参加するためには関心がまずあり、次に手助けの必要な箇所に気づくというステップが重要である。他者の気づきへの気づきも参与の契機になることから、関心は作業の進行状態だけでなく活動に参加しうる他者の認知状態にも及ぶと考えられる。

謝辞 調査にご協力いただいている歴代の野澤組惣代・保存会・三夜講の方々に感謝します。本研究は、科研費基盤(B)「祭りの支度を通じた共同体〈心体知〉の集団学習メカニズムの解明」(2015~2017年度、代表:榎本美香、研究課題番号:15H02715)の補助を受けています。

#### 参考文献

- Allen, J. F. (1983). Recognizing Intentions from Natural Language Utterances. In M. Brady & R. C. Berwick (Eds.), *Computational Models of Discourse*, 107-166. Cambridge, MA: MIT Press.
- 榎本美香・伝康晴 (2015). フィールドに出た言語行為論:「指令」の事前条件達成における相互行為性・同時並行性・状況依存性. 『認知科学』, **22**, 254-267.
- 榎本美香・伝康晴 (2016). 目の前の活動に「手を出す」力を育む~野沢温泉道祖神祭りに携わる「三夜講」の経時的変化の分析~. 『人工知能学会研究会資料』, **SIG-SLUD-B503**, 30-35.
- Litman, D. J. & Allen, J. F. (1987). A Plan Recognition Model for Subdialogues in Conversations. *Cognitive Science*, **11**, 163-200.
- 高梨克也 (2010). インタラクションにおける偶有性と接続. 木村大治・中村美知夫・高梨克也(編), 『インタラクションの境界と接続』, 39-68. 昭和堂.